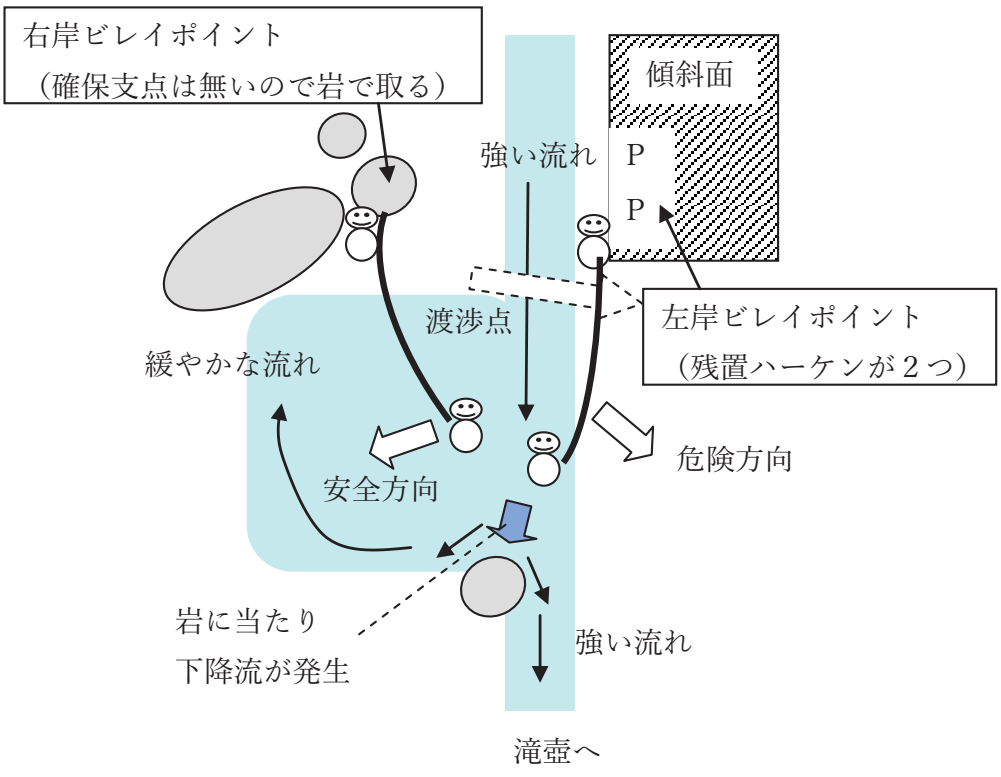


大峰 前鬼川 大滝 (2段10メートルの滝) の上部渡渉点  
 下降時での通過方法ガイドライン案

- (1) 中間者の渡渉方法ガイドライン：
- ① 安全方向（右岸）へのビレイ
  - ② フィックスロープの片方をムンタ-ミュールで固定し、カラビナスルーで通過する
- (2) ラストの渡渉のガイドライン
- ③ 安全方向（右岸）で折り返したトップロープとし、ロウワーダウンの形で、左岸でビレイ

① 流されても安全方向になる右岸でビレイする

滑落した場合、ロープを流して、流れの緩やかな淵に誘導する。  
 (この内容は、当該会の報告書に記載の通り)



② フィックスロープの片方をムンタ-ミュールで固定

右岸でのビレイと併用し、  
万が一滑落時に強い水圧で水中に押しつけられた場合は、  
ムンタ-ミュールを解除し、安全方向の右岸に導くことが出来る。

議論の背景

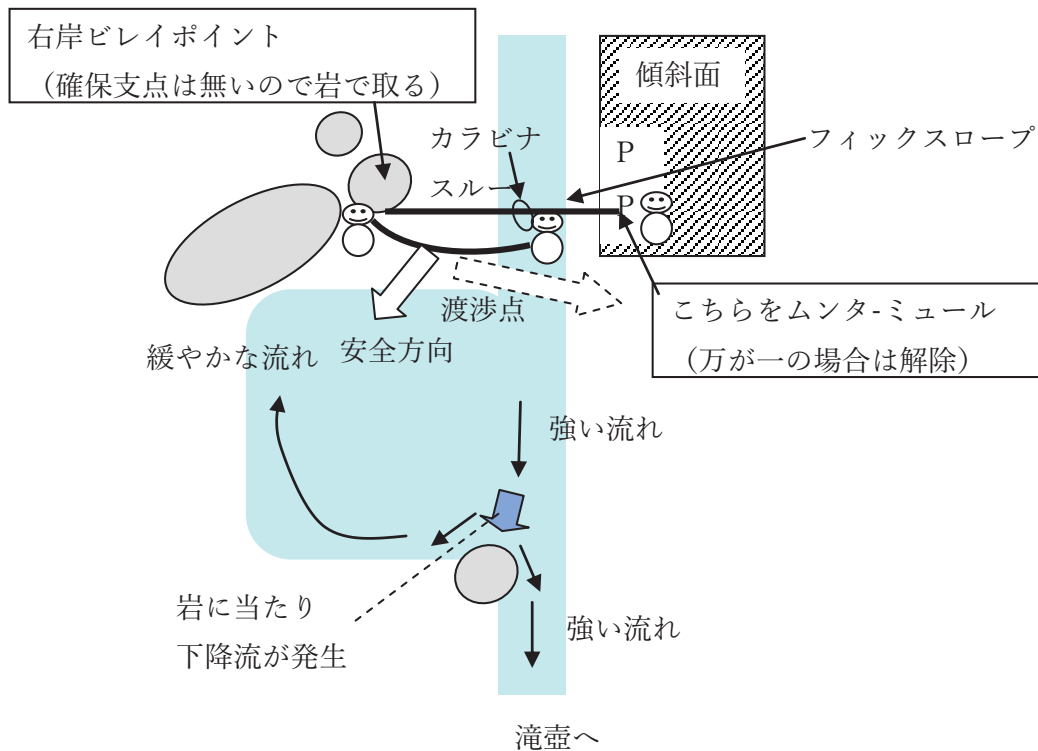
両側を固定されたフィックスロープにカラビナスルーすると、水圧から脱出できず溺死する恐れがあり、その為、当該会の報告書ではカラビナスルーの危険性（デメリット）が指摘されていた。

一方でカラビナスルーは、不要な滑落を防ぐことも出来る。

今回、カラビナスルーのデメリットを改善する事を提案したい。

なおカラビナスルーを使わず手で持って通過する場合も、同様に行う。

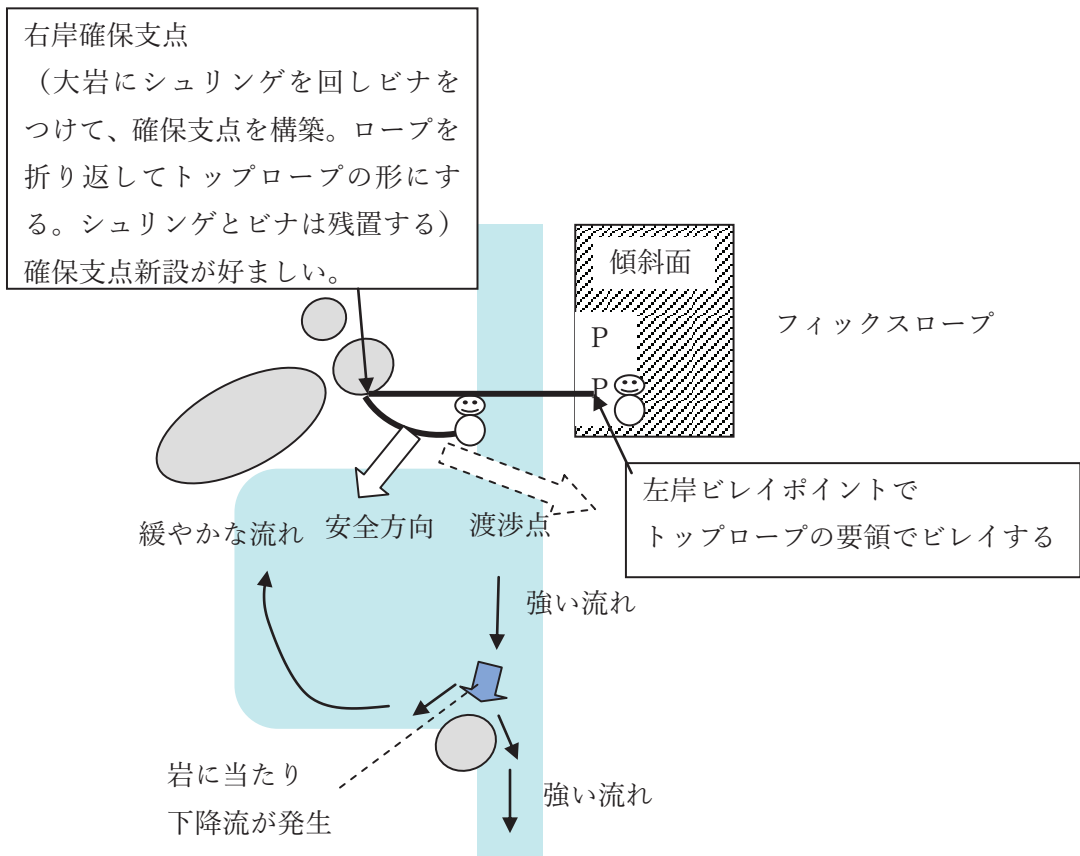
またフィックスロープを2本はり、2回目のトライにも使えるようにすることも可。



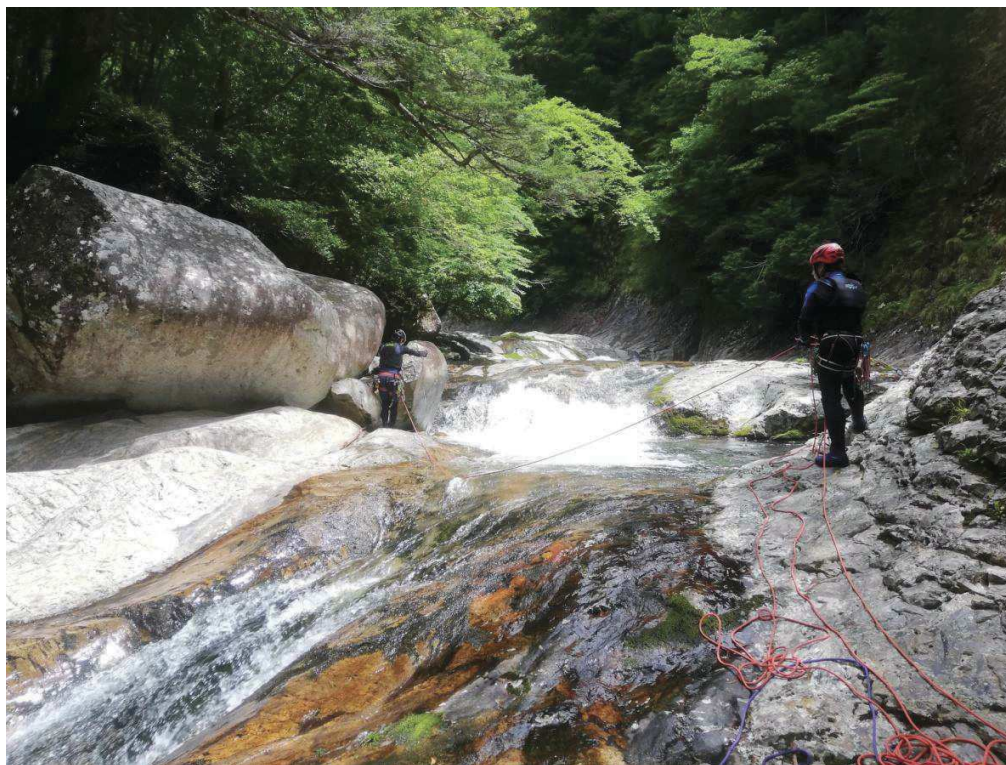
③ 安全方向（右岸）で折り返したトップロープとし、  
 ロウワーダウンの形で、左岸でビレイ

ラストを左岸で直接ビレイすると、万が一滑落した場合は滝壺に向かう危険方向に流され、かつに強い水圧で水中に押しつけられ溺死する恐れがある。

これを避けるために、右岸でいったん折り返したトップロープの形とし、左岸でビレイする。この形だと、万が一滑落しても安全方向である右岸の淵に誘導することが出来る。



現地の写真



右岸

写真1

左岸



写真2 右岸の支点候補



写真3 左岸の残置ハーケン

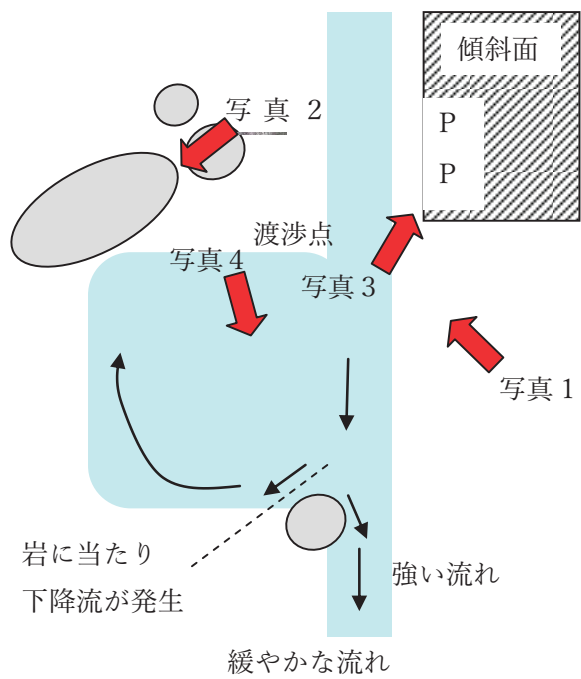






写真 4 滝への落ち口 右側がトロ場



写真 5  
2 段の下部の滝

大阪府労山 教育遭難対策部 2023 年 7 月 25 日 第 21 回事故対策会議資料から抜粋